

イタリアオペラのスコアリーディングの一指針

～モーツァルト作曲・ダポンテ台本「コジファントゥッテ」第1幕台本に隠された官能的表現を探る～

絹川 文仁

One guide to analyzing the score of Italian Opera~Investigating sexual expressions underneath the texts of the libretto of *Così fan tutte* (1st act) by Mozart and Da Ponte

Fumihito KINUKAWA

1 はじめに

本稿は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart) 作曲、ロレンツォ・ダ・ポンテ (Lorenzo da Ponte) 台本による、二幕のドラマジョコーゾ (Dramma giocoso) 「コジ・ファン・トゥッテ (Cosi Fan Tutte)」の魅力の一端を探るべく、特にその台詞に含まれる官能的意味合いといったものを主に浮き彫りにしていくものである。

この作品は、1790年1月にウイーンで初演されて以来、これから本稿でのべていく内容と無関係ではない問題も起因して、あまり日の目を浴びないままだったが、ここ百年間は前述の制作コンビによる「フィガロの結婚 (Le Nozze di Figaro)」 「ドンジョヴァンニ (Don Giovanni)」 とほぼ同様に、世界中のオペラハウスでピュラーな作品となりつつある。

この経緯の詳細については触れないが、一言でいうなれば、女の浮気を主題とした、まるで夫婦のスイッチングのような下品で荒唐無稽なドラマトウルギーに、当時の音楽家も聴衆も半ば拒否反応を示していた時代があったようなのである。かのベートーヴェンもこの作品を不健全極まりないと批判したらしい。

しかし、モーツァルト研究が進み、特にモーツァルトの生涯と密接に関連するだろうそのヒューマニティ溢れる登場人物についての深い認識が積み重ねられた結果、実はそのメチャクチャなドラマや本稿で触れる性的ニュアンスにこそ、この作品の魅力を構築しているという結論に至りつつある今日である。

先ずは、嘗て物議を醸したであろうこの作品のあらすじを次項にて述べる。

2 *Così fan tutte*のあらすじ

ところはナポリ。兵士のグリエルモとフェランドが自らの恋人は絶対に操を守ると自慢するので、年長の哲学者ドンアルフォンソは女は必ず浮気すると主張し、口論になる。その結果、二人の兵士とアルフォンソは賭をすることになる。

賭のシナリオは、二人が出兵したことにして、彼らがいないうちに彼らはアルバニア人に変装して、それぞれの恋人を取り替えて真剣にアタックするというもの。

アルフォンソは、兵士の恋人の姉妹フィオルディリージとドラベッラの小間使いデスピーーナを金で釣り、二人の兵士が出征している間に、彼らに変装したアルバニア人が姉妹の家によく来られるようにする。そして、グリエルモはフェランドの彼女のドラベッラを、フェランドはグリエルモの恋人フィオルディリージをそれぞれ口説く。

頑ななまでに拒否していた彼女たちも、命がけで口説く彼らに徐々になびき始め、ドラベッラがまず落ちてしまう。それを知ったフェランドは絶望と怒りに苛まれるが、その分だけ真剣にフィオルディリージにアタックし、陥落させる。

アルバニア人と二人の姉妹が合同で結婚式を挙げて証書にサインをした途端、二人のアルバニア人は消えて、元の兵士になって戻ってくる。兵士は姉妹の不貞に怒り、姉妹は死を覚悟しながら謝りに謝る。ところが実は、アルバニア人たちは二人の兵士の変装だったことも知るに及ぶ。この光景を見たアルフォンソは、女はみなこうしたもの、許してやれと助言し、賭け金をお祝いとして元の鞘に戻してやって幕となる。

3 本稿の意義

周知のとおり、このコジファントウツテは他の大多数のオペラ作品と違って、台本のロレンツォ・ダ・ポンテとモーツァルトの完全創作劇である。同じコンビによって創られた「フィガロの結婚」におけるドンバジリオの台詞「女はみんなこうしたもの*cosi fan tutte le belle*」に、時の皇帝ヨーゼフ二世が大いに溜飲を下げて、これをテーマにオペラを創るよう二人に要請したという説がまことしやかに伝えられてはいるが、その信憑性は微妙なようだ。そのあたりはともかくとしても、ある意味での二人の天才が闊達にクリエイトしてみせた作品であるからにして、その隅々に至るまで様々な工夫や配慮がなされていることは疑いようがない。言うなれば、オペラのどの傑作にも共通して語られるところの「たった一個の休符にも意味のないものは無い」のである。

また、二人でクリエイトしてみせたと述べたが、この作品について言及している研究書の中で最も信用のおけるものは、台本作家と作曲家の垣根を越えての二人の共同制作、即ち、ダポンテは音楽のことにも口を出し、片やモーツァルトも台本のことにはかなり注文を出した事を、あくまで推論の域を脱しないながら、異口同音に述べている。そのあたりも、他のオペラ作品の制作過程とかなり色合いを異にしているのである。

ところが、現在発行されているこの作品についての研究書や解説書の殆どは、大まかなところでの魅力や分析を述べてはいるものの、一字一句について詳細なアナライズを施したものは皆無に近いものがある。勿論、台本の対訳自体は一語一語に則しながら、わかりやすい文章となっているものは多い。がしかし、オペラの台本の魅力の一つといえる「言葉に隠喩された意味合い」まで解説したものは、筆者が知る限り殆どない。

そこで本稿では、先ずはこの作品の第一幕にターゲットを絞って、この作品の大きな魅力の一つと言える官能的ニュアンスを含んでいると予測できる語句を中心に抽出していき、それらの意味合いをストーリーの中で改めて位置づけることとした。

予め声を大にして断っておくが、本稿は浅はかな興

味本位で官能的なニュアンスなどを取り上げようとしているのではない。

本稿冒頭で述べたように、この作品はドラマジョコーズ（滑稽でふざけた劇）と原作者達から位置づけられていながら、オペラのカテゴリーではオペラブッファ（*opera buffa* 喜劇）と言われてきた。

これらの様式の厳密な分けは、実はこの作品の本質的問題と関わってきて、それ自体壮大且つ詳細な論述が必要とされるゆえ、本稿では踏み込んだ言及はしないものの、敢えて簡略しながら説明するならば、音楽もドラマも大凡ブッファ的のだが、ブッファの定番である“みんなが仲直りして幕切れ”という単純なハッピーエンドとは一線を画した、シリアスな解釈も可能な幕切れの言葉「物事すべて良い面を見て、どんな運命や出来事に遭っても、理性で切り抜けられる人は幸せ。普通の者が泣く事でも、こうした人間には笑いでしかない。」のウエイトはこの作品で大きいものがあり、単にオペラブッファとは位置づけず、悲劇的側面をも漂わせるドラマジョコーズとした二人の原作者の深い意図が想像できるのである。

しかしながら、以上の大きなテーマに辿り着く以前に、この作品ではオペラブッファ、即ち喜劇たる魅力が満載されていることも疑いようがない。周知のように喜劇の起源は、古代ギリシャの結婚式で男根（ファルス）を持ち歩く儀式からなのであり、喜劇の本質“命の誕生”とエロスは表裏一体とも言え、それゆえ古今の喜劇では、直接的にしる間接的にしる、所謂“下ネタ”が頻出するのである。

繰り返しになるが、本稿では主にそのような意味合いの語句を細かく抽出していき、殊に教育現場では言及しにくいような内容でも、モーツァルトとダポンテの芸術的表現として最大限の敬意を払いつつ、筆を進めていく事とする。

4 モーツァルトとダポンテの生涯に垣間見られる本稿と関連するもの

モーツァルトの晩年の傑作「魔笛」は、周知のように秘密結社フリーメーソンの秘儀オペラとされており、キーナンバー「3」をはじめ、至る所にフリーメーソ

ンの入信儀式が時には直接的に、時には間接的に比喻されていることは特に有名である。それは、台本担当のシカネーダーのみならず、モーツアルト自身がフリーメーソンの会員だったことから、二人揃ってそのあたりのアレンジメントを企てただろう事は自明の理であり、モーツアルトが幼少の時から4カ国語を操り、若干11歳にして三角関係のオペラを作曲した事等と相まって、メタファーをはじめとした言葉の修辞法にも少なくない才能を持ち合わせていただろう事も想像に難くない。

それは、394通も保存されているモーツアルトの書簡にも同様の事が言える。例えば、生まれ故郷のザルツブルグからウイーンに転居せざるをえなくなったザルツブルグの大司教コロレードとの大喧嘩に関連した彼の手紙では、当時の手紙にまで及んでいた厳しい検閲をかいくぐって、逆にそれすら弄ぶかのように「音痴の大司教」「大きな邪魔者」「人間の敵」「回教坊主」と大司教のことをバリエーション豊富な暗号で馬鹿にしていた。また、肉体関係があったとも噂されている従妹のベズレには山のような手紙を送ったらしいが、表向き下品な言葉の乱発だったにもかかわらず、一度暗号を読み解くように解釈していくと、巧みなまでにモーツアルトのウイットに富んだ遊び心が浮き出てくるという。

一方、台本のロレンツォ・ダ・ポンテはベニス近郊の小さな町チエーネダで生まれた神父だったが、幼少時よりダンテの偉作等を次々と暗誦するなど、天才的なまでに文学的才能を開花させ、神学校の文学の教授職に就いていた。言ってみれば、当時における古今のイタリア文学、修辞法やその他の文学的表現法にも精通していたわけである。その後、ベニスで教会の複数の女信者と懇ろの仲になるほどのプレイボーイ振りを発揮し、結局はその罪でベニスを追放となり、各地を転々とした後、ウイーンに行きモーツアルトと出会った。特に二人を近づけた要因として、お互いに能力がありながら世に認められておらず、しかもダポンテの持つ文学的才能に導かれた人間の本质を鋭く洞察する力に、モーツアルトは他のイタリア人とは違う魅力(当時のウイーンには、力がないのに口のうまさだけで

出世したイタリア人芸術家がかかなりいたらしい)を感じ取ったらしいのである。

以上のような二人の生涯を状況証拠的見地でざっと辿ってみても、本稿で主眼とする官能的ニュアンスのみならず、このコジファントウツェにおいてどれほど興味深い工夫が多方面に渡って施されているか、殆どの疑いの余地すらないであろうと筆者は確信する。

5 台詞の検証

以下、一般に市販されているスコアやリブレットの頁順に分析していくこととする。

まずは、裏表紙に掲載されている登場人物等についてである。

5-1 登場人物について

前述のように、この作品は原作となるものがない、二人の制作者の手による完全なフィクションである。とすると、登場人物のネーミングや舞台となった場所などから、その意味合い(裏に隠されているであろうものも含めて)を調べることが肝要と思われる。まずはイタリア語の辞書等を参考に、以下のように登場人物から見ていく。

二人の姉妹

・Fiordiligi=fiorは「花」、ligioは「忠実な」、diは前置詞で英語のofと同様、よって「忠実な花」がその原義で、この作品にとって皮肉なまでに相応しいネーミングと言えよう。因みに第二幕後半、フィオルディリージがフェランドの口説きに陥落したことを知ったグリエルモは「FiordiligiではなくFiordiaivoloだ! (diavoloは悪魔の意味だから、悪魔の花!ということ)」と叫んでもいる。

・Dorabella=Dora→di oraは「金色の、金メッキする」、bellaは「美しい」、よって「美しい金メッキ」が彼女の名前の原義で、変装したアルバニア人の口説きにいち早く陥落する軽さが「金メッキ」に象徴されていると思われる。

尚、以上の姉妹はイタリアの中都市フェッラーラ出身と台本、スコアに明記されている。この位置づけには二つの説があり、一つはフィオルディリージを初演

したソプラノ歌手がダポンテの彼女でフェラレーゼという名前だったこと、二つ目は昔からフェッラーラの女は～フェッラーラが都市国家の先駆的存在、そしてイタリアで最も早くユダヤ人を受け入れた町という歴史などから～モダンで新しいものを受け入れ好きな性格が多い事に端を発し、この作品に於いて初めは頑なに貞操を守ろうとするものの、執拗な口説きに対して、異教徒にもかかわらずあっさりと陥落する様を、予めフェッラーラ出身の女という事が暗示しているとも解釈できる説である。尚、筆者の推論を更に加えると、ダポンテ自身もユダヤ人であったことから、前述のようなフェッラーラという町にある特殊な思いがあった可能性も否定できないのである。

〔二人の兵士〕

・Ferrando=ferroは「鉄」であり、イメージシンボル事典⁽¹⁾（以下、本稿の解釈の殆どは同書に拠る）によると「鉄は忍耐の象徴」を表すとのこと。確かに本作品二幕にて、自分の恋人が浮気に走ったことを知った際、相方のグリエルモは公然と罵詈雑言の数々を感情的に叫んだのに対して（第2幕第13景のレチタティーヴォ）、このフェランドは決して他人に感情をぶつけずに、自己の内面で激しい怒りと葛藤に苛まれていることを独白するのみである（第2幕27番のカヴァティーナ）。このような意味に於いて、フェランドは少なくともグリエルモと比較して、我慢強く忍耐のある男と位置づけられるのである。

・Guglielmo=gugliaは「尖った、尖った男」であり、劇中、明らかにフェランドと比べて猪突猛進の行動は随所に見られ、換言すると、がむしゃらな性格とも言えよう。また、この「尖った」をリビドー的に解釈すると、男根の勃起状態とも捉えられ、第2幕第5景で、ひたすら押しの一手でドラベツラを口説く場面などはまさに象徴的である。そして、これは第2幕第12景でフェランドがフィオルディリージに甘いムードで迫っている事と好対照でもある。

・Don alfonso=イタリアの男の一般的な名前だが、歴史を繙くに、二人姉妹の出身地Ferraraの歴代領主にalfonso I とalfonso II がいたことに由来して、この名前がつけられたであろうことが推測可能である。それによって、

この作品のふざけた賭のシナリオをアルフォンソが作るにあたり、自らの長く多様な経験（特にフェッラーラでの）に基づき、フェッラーラ出身の女はこうすれば確実に陥落する、という見立てを立てていたのである事も想像できうる。

・Despina=de…は「～を抜かれた」、spinaは「棘」であるから、「棘を抜かれた」がその原義。日本人的に解釈すれば、棘棘したところがなくなって丸くなったと言えようが、それだけではなく、前掲のイメージシンボル辞典によると「棘は性欲の意味」ともある。これによって、若くて世の中をあまり知らないが、ある意味で性欲に溢れている二人の若い姉妹に対して、事ある毎に「男なんていうものは・・・」「どンドン遊んじやなさいよ」と恋愛を達観したフレーズを連発させることが、そのネーミングからしてごく自然となってくるのである。

〔舞台となるナポリについて〕

・Napoli=イタリアの三大都市のひとつナポリは、オペラブッフア発祥発展の町として音楽史上つとに有名で、町の雰囲気は昔からがさつなワイドショウの巢窟のようだったとのこと。まさに、このコジファントウツテのような一見ドタバタに近い喜劇仕立てにはうってつけなのである。

以上を鑑みるに、登場人物や地名のどの固有名詞をとってみても、この作品のストーリーと深く関わっているネーミングばかりと言い切って差し支えないと思われる。特に、人名のドラベツラ、グリエルモ、デスピーナは性的意味合いをそれなりに絡めた名前であることも認識でき、また、フィオルディリージの名前もこのドラマの展開していく上では、皮肉も込められながら同様といえるのである。

以下、幕開きと共に本稿の趣旨と関連がありそうな語句を列挙しながら、そのアナリーゼを進めていくこととする。

(1) 山下主一郎 イメージシンボル事典 大修館書店 初版 p358 2003

5-2 第1幕1景

第2曲三重唱

1、Alfonsoの「E la fede delle femmine Come l'alba fenice」におけるfenice=誰も見たことがないアラビアの「不死鳥」の意味だが、「貞節」の意味もある。即ち、ここでは“アラビアの不死鳥の如く、女の貞節なんて誰も見たことがないよ”を、この一文だけで語っていることになる。

2、AlfonsoのRecitativo「Alle vostre Penelopi」におけるPenelopi=ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」の主人公オデュッセイアの貞淑な妻で、20年間戦いに出た夫を待ち続けた。多くの求婚者がいたのにそれを退けたゆえに、妻の貞節の鑑、忍耐の代名詞となっている。ここでは、反語的にからかいながら、二人の姉妹をそのように称しているのである。

第3曲三重唱

3、Ferrandoの「Una bella serenata」におけるserenata=直訳すると、夜の歌。具体的には、日が沈みはじめた時、愛しの彼女の家まで赴き、求愛の自作即興詩を歌い上げること自体をserenataと称する。それほどまでに、フェランドはこの賭に勝っても単なる金銭の勝ち負けを重んじるばかりでなく、愛する彼女へのメンタル、プラトニックな側面こそ重要視するキャラクターであることが伺い知れる。

4、Gugliermoの「In onor di Citerea」のCiterea=アフロディーテ（ヴィーナス）の別名、美と愛の女神。前述のフェランドとは対照的に、この下りの前後でグリエルモは賭に勝ったら「美と愛の女神に敬意を表して、宴会をドーンとしたい」と即物的な快樂もストレートに語っている。

5-3 第1幕2景

第4番二重唱

5、Fiordiligiの「Se bocca piu bella」のbocca=口の意味。ところが、口は性の二元性を表し、閉じれば一本の線となって男性を表し、舌は男根を意味する。また、開けると女性の陰門。いずれにしても、フィオルディリージはこの場面で、グリエルモの絵姿を見ながら～その絵姿が大写しで客席には見えなくとも～そのきりりと無一文字に閉まった口を見て、性的衝動に駆られ

ていることが自ずと読み取れるのである。

6、Dorabellaの「Che foco ha ne'sguardi」のsguardi=目の意味。ところが、目は睾丸の婉曲表現。よってこのドラベッラはフィオルディリージと同様に、或いはそれ以上に、熱い性的衝動を抱いていることが伺える。因みにギリシャ神話のオイディプスも目をつぶしたのではなく、自ら去勢したという解釈が存在する。

7、同じくDorabellaの「se fiammase darti」のdardi=矢の意味だが、男根も意味する。因って、ここもドラベッラの性的興奮を前項6、に続いて、より語ったものといえよう。

8、Fiordiligiの「Si vede un sembiante guerriero」のguerriero=兵士の意味のみならず、勇敢さ、大義への献身も意味する。因って、彼女はグリエルモの（尖ったまでの）勇敢さにも惚れていることとなる。

9、Dorabellaの「Si vede una faccia」の「faccia」=顔の意味だが、権威または誘惑の意味もある。これまで本稿で述べてきたドラベッラの性格からして、“彼の顔を見れば見るとそそられてしまうわ”という解釈が妥当なのであろう。

5-4 第1幕3景

第6番五重唱

10、姉妹の「Immergeteci l'acciar」のacciar=剣の意味で、この前後の文と合わせて「剣を突き刺して下さい」となるが、男根という意味もacciarにはあるので、裏の意味として「今すぐにセックスをしてください」とも読み取れる可能性がある部分である。

11、Fiordiligiの「Pria ti vo' morire ai piedi」のpiedi=足の意味で「その前に貴男の足下で死にたい」という意味である。が、piediには男根、生殖器の婉曲表現の意味合いもあるゆえ、これも10、と同様、セックスに関連した意味である可能性がある。因みに靴は陰門を意味する。

5-5 第1幕第5景

第8番合唱

11、合唱の「Il fragor di trombe e pifferi」のtrombeとpifferi=trombeはtrombaの複数形でラッパのことで、名

声の持ち主、戦いを象徴。特に軍隊ラッパは元来角笛で、妻を寝取られた夫を象徴するという事からにして、これをクローズアップさせると、既にこのオペラにおける賭の結末も暗示されているという解釈もできる。Pifferiは笛pifferoの複数形で、男根と陰茎の俗語でもある。ということは、この前後の文脈と合わせて「軍隊生活は日ごと、場所も変わり、陸や海であちらこちらの女たちと一戦まみえる楽しいものよ！」とも解釈可能となる。

5-6 第1幕11景

12、六重唱の冒頭で、二人の兵士がアルバニア人に変装して登場すること＝アルバニアの国名は「鷲の国」を意味するが、鷲は不死鳥と男性の精力の象徴でもある。どちらの意味をとっても、ここまでのストーリーには不自然ではなく～アラビアの不死鳥と掛けること、及びこれから二人の姉妹に果敢にアタックすること～単にイタリアとはアドリア海の対岸の国だから持ち出したというような、短絡的発想ではないことを裏付けるものといえよう。

13、GugliermoのRecitativo「Farfalette amoroze」のfarfalette＝蝶々の意味。しかし、蝶々には気まぐれ、うつろぎの意味もあり、態々この言葉を使ったということは、ここの意味「愛に悶える蝶々」は、実は「愛に悶えるうつろぎな蝶々は」を暗喩していることが伺える。このうつろぎは、浮気しがちというよりも、むなしくぼんやりした様という意味で、同情を買おうとするニュアンスが伺える。

第14番アリア

14、Fiordiligiの「Come scoglio immoto resta」の「scoglio」＝岩、石の意味だが、男根、睾丸、も意味し、また太陽神の子宮も表す。ということは、恋人の生殖器も自分のそれも不動のもの、即ち一切不貞は働かない一途のものである事を象徴しているといえよう。

15、Fiordiligiの「Con noi quella face」のface＝松明の意味。一般的に松明はまわりを明るくし、心を温めるということで、愛情を意味する場合もある。その他、男根も意味するので、ここでは「私たちには元々彼からの愛情が（彼とのセックス経験も）あるのですよ」と

も受け取れるのである。

16、GugliermoのRecitativo「Il balsam d'amore」のbalsam＝バルサムの木から取れる芳香油で精力剤に使われる。ということは、この前の文「あなた方の目の美しさが我々の心に傷を開き、それを癒してくれるのは、愛の精力剤だけなのです」といった性的に意味深な表現を強気で用いながら、二人の姉妹に迫っている場面となるのである。

第15番アリア

17、Gugliermoの「Abbiamo bel piede,Bell'occhio,bel naso」のpiede,occhio,naso＝piedeは前掲のように男根のことで、occhioも前掲のsguardiとほぼ同義なので睾丸のこと。そして、nasoも男根を象徴しているゆえ、この場面では、グリエルモが自分がアルバニア人に変装した顔立ちと共に、自分のイチモツが立派であることを自慢しているとも解釈できるのである。

18、Gugliermoの「Pennacchi d'amor」のpennacchi＝羽根飾りを意味するが、歴史的にはそれによって騎士や兵士の行動範囲がわかり、且つ、その愛人がわかったとの事。ここでは特にpennacchi d'amor愛の羽根飾りと愛を強調しているので、積極的に自分の愛人となるよう迫りまくっている意味合いが彷彿とされるのである。

5-7 第1幕13景

19、DespinaのRecitativo「A lagnarsi colla'aria e colle mosche」のariaとmosche＝ariaは空気の意味だが、天国、永遠の意味もある。また、moscheはハエの意味。しかし、ハエには情欲の意味もあるゆえ、ここでは恋人が出征した上、変なアルバニア人に言い寄られて失意の姉妹たちのことをデスピーナが「可愛そうなお嬢さん方は、空気に嘆き～永遠に不幸という意味で～ハエに嘆いて～情欲が満たされないという意味で～いらっしゃいます」と言っていることにもなりうるのである。

5-8 第1幕15景

第18番終曲

20、姉妹の「Stelle,un velen fu quello?」のvelen＝velen(o)は毒のことで、歴史的に毒は夫婦が殺し合うときの典型的手段とされている。ということは、アルバニア

人に変奏した二人の兵士は、この猿芝居の中で、夫婦になる覚悟をまで持ちながら、何も事情を知らない姉妹にアタックしているだろうことが毒の服用という意味からも伺えるのである。

6 考察

以上、この作品の第1幕のみをざっと見ても、様々な語句に性的意味合いが隠された形で台本が構築されている事が伺い知れよう。

無論、そのような意味合いまで詮索せずとも、ある程度意識された対訳を読み進めていくだけでも、筋書きの把握はそれなりに可能ではある。しかし、一度「登場人物のネーミングには何か理由があるのか？」に始まって、「不死鳥や、蝶々、ハエなどが何故唐突にでてくるのか？」といった素朴な疑問を抱き始め、それが解決されないまま読み進めれば進めるほどに、釈然としない部分が徐々に肥大していくこともまた事実である。特にイタリアオペラを本家本元とするイタリア国内で上演する時でも、イタリア人を対象に字幕スーパーを見せるようになってしまった現代に於いては、イタリア人はもとより、他国の人々には百科事典などのそれなりの重みを有した参考資料を常備しながらでないと、殆ど理解不能なのである。

筆者の推測では、ある意味でそのあたりを見事なまでに衝いてみせたのが、この作品の二人の制作者モーツァルトとダポンテだったように思われる。

この作品は単なるオペラブッファではなく、ドラマジョコーズと位置づけられている事は本稿の冒頭で述べた通りだが、それにかなり大きく影響していたのが当時のモーツァルトのプライベートな空間だったという説はかなり有力視されている。というのは、例の、妻コンスタンツェと弟子ジュズマイヤーの不倫である。これに深刻なまでに思い悩んだモーツァルトだからこそ、浮気と操の激しいばかりの心理的葛藤をそれぞれの個性に合わせて作った姉妹のアリア（11番、25番）、フェランドのアリア（27番）を創ることができ、一見ドタバタに進むこのオペラにおいて、それらは両極を構築するほどにシリアスで人間の本質に迫るのである。これらのアリアに漂う悲痛さは、下手な悲劇のオペラ

を遥かに凌ぐもので、その時のモーツァルトの心境を代弁したアリアといっても過言ではないのである。

また、ダポンテの生い立ちも無関係ではなく、前述のように聖職者でありながら、プレイボーイの文学教授、そして経済的にそれほど恵まれていなかったという境遇により、上記のようなモーツァルトの悲痛な叫びを潜在させつつ一見喜劇の体裁をとるこのオペラの制作に大いに意気投合しながら、筆を進めたであろう事は想像に難くないのである。

要するに、彼ら二人の天才は安っぽい喜劇を良しとせず、女の浮気という痴話を、諧謔を込めた生々しい人間の心理ドラマに仕立てているのである。こう考えていくと即座に思い出されるのが、モーツァルトは聴衆の熱狂的な拍手喝采よりも、音が鳴り止んだ後しばらく間を置いた後の静かな拍手を好んだというエピソードだ。これからも、コジファントウツェに限らず、モーツァルトの作品の数々が知的で人間洞察に満ちたものであったかが納得できるのである。

だからこそ、ちょっとしたおふざけの性的表現を施す場合でも、決してストレートには語らず、このオペラを観る者にまるでメタファーのクイズゲームを投げかけるように、様々なメタファーを駆使したであろうことは容易に頷ける、となるのである。明け透けな性的表現は下品で、この作品の本質を貶めるのみならず、実は官能的描写はメタファーなどのオブラートに包んだ方が、より魅力を増すことを二人の制作者は見抜いていたのであろう。これは、「フィガロの結婚」「ドンジョヴァンニ」を他のモーツァルトのオペラと比較して明白なように、ダポンテの力量に因るところが大きいともいえよう。

翻って前述の性的意味合いの描写を見るに、やはり二人の天才に感嘆せざるをえないものがある。

例えば第2景、二人の姉妹がお互いの恋人を自慢しあっているシーンで、それぞれ「口」「目（は矢を放っているよう）」に見とれているが、前述のようにどちらも男性のセックスシンボルを暗喩している。ここの音楽的工夫は絶妙で、それぞれの言葉が出てくるまでの姉妹の歌い出し「ねえ、この絵姿をみてちょうだいな！」は（フィオルディリージは8小節、ドラベッラ

は5小節) 旋律的にも序章のようなもので、暗喩された言葉がスタートしたところから主題的旋律も始まっているのである。モーツァルトが如何にそういった言葉を重要視したかの、一つの証拠といえよう。

また、第13景におけるデスピーナのレチタティーヴォ「可愛そうなお嬢さん方は、ハエに嘆いております」も、「ハエ」と聞いただけでも何とはなしに笑って過ごせる言葉を用いながら、知る人ぞ知るで、ハエが情欲を意味することから「あの姉妹は欲求不満が溜まっているんだよ」というメッセージも何気なく同時に発することが可能なのは、博学な天才達の為せる技としか言いようがないのである。

7 終わりに

この作品の第2幕については次回の課題とするが、本稿に於いて第1幕をまとめただけでも、次幕への期待というものが膨らむ一方である。

また本稿をまとめていく際、とても幸いなことに、非常に興味深い有益な書物に出会えた。特に、我が国最高のオペラ研究家である永竹由幸氏の著書は、目から鱗の連続、溜飲が下がるばかりであった。大変残念ながら、氏は昨年逝去されてしまったが、妻がイタリア人でイタリアにも十数年間居住されたことによる、イタリア語をはじめとした語学への強味、そしてそれによって世界中で活躍するオペラ歌手や指揮者とも親交が深かった故、単なる無機的な情報の羅列ではない説得力溢れる文章の数々は筆者のオペラ研究の礎であり、どの著書も座右の銘に近いものがある。

本稿を書き始めるにあたって、筆者を大いに鼓舞させた氏の文を以下に披瀝してまとめとする。

「だいたいにしてモーツァルト学者は品の良い人が多く、品が良いを裏返すと下品なところは見ないということにもなる。そういう偉い学者は、どうもモーツァルトを音楽の天才、天才と偶像視しすぎて、モーツァルトの人間を見る目の鋭さとか、台本に対する細かい気配りといった音楽以外のところでの彼の優れた面に目を向けてくれないのだ。一方モーツァルトでひと稼ぎしようとする悪い連中(私から見ればのことだが)はサリエリの名譽を奪い、モーツァルト像をまるで

糞尿好きの天才バカに仕立て上げている(筆者註:アカデミー賞を受賞した映画「アマデウス」を揶揄している)。もしもモーツァルトがそんな人間だったら、あの「フィガロの結婚」のような名作は絶対に生まれていない。モーツァルトは確かに糞尿に関することをわざと話題に持ち出しているが、それは綺麗に着飾った人々が、まったく糞も小便もしないような顔をしているから、何を言ってもやがるんだ、オツにすましていたって、貴様ら屁もこくし、糞もするんだろう、そう気どるんじゃないねえっ、てな気があったからだろうし、セックスに関しても、相当きわどい卑猥なことをずけずけと言っているが、これも同じ気持ちだったのであろう。それは当時の表面上は徹底的に品良くとりつくろった貴族社会への反抗であったのだろう。しかしだからと言って、それを一日中言いまくってとびはねている奇人ではなかった。普通の人は絶対に言わないのに彼は口に出したにすぎないのだ。」⁽²⁾

引用文献

- (1) 山下主一郎 イメージシンボル事典 大修館書店 初版 p358 2003
- (2) 永竹由幸 ロココの裏の欲望 モーツァルトのオペラワールド 株式会社ショパン 初版 p71~72 2006

参考文献

- 山下主一郎 イメージシンボル辞典 大修館書店 初版 2003
- 小瀬村幸子 オペラ対訳ライブラリー モーツァルト コジファントウツテ 音楽之友社 第12刷 2012
- 岡部博司 名作オペラボックス9 モーツァルト コジファントウツテ 音楽之友社 第10刷 2001
- 永竹由幸 ロココのスカートをまくった男モーツァルト 扶桑社 初版 2007
- 永竹由幸 ロココの裏の欲望 モーツァルトのオペラワールド 株式会社ショパン 2006
- 永竹由幸 オペラの数ほど愛がある 集英社インターナショナル 2007
- 三雲ひろ太 モーツァルトのイタリア “マエストリーノ”の聖地巡礼、その栄光と蹉跎 JTB
- 小川熙 イタリア12小都市物語 里文出版 2007